

創立者と共に歩まれた四半世紀

まがり
鉤 治 雄

寺島建一先生との出会い

今から、25年前の1987年（昭和62年）の春のことである。通信教育部の専任講師として、創価大学に着任が決まっていた私は、大学関係者の方々への挨拶や引っ越しの準備もあって、その年の3月に、2度、大阪から創価大学を訪れた記憶がある。

2回目の大学訪問の折、八王子のことなど右も左もわからぬ私を、教務部の職員であった稲垣司さんが、栄光門の前で丁重に出迎えて下さった。その後、当時の通信教育部長の菅澤實先生の案内で、ロワール食堂横の旧通信教育部棟の研究室に初めて通された。

1階の事務局で、職員の方々に挨拶を済ませた後、2階の研究室に案内されたとき、初めてお会いした方が寺島先生であった。研究室がある内廊下にさしかかった時のことである。研究室から、ドアを開けて出て来られた寺島先生は、私の顔を見るや否や、「はじめまして。寺島です」と、あのいつもの大きな声と、温かいまなざしで、やさしく挨拶をして下さったのである。薄黄色のセーターを着用され、内履き用のスリッパを履かれていたように思う。その時の柔和な笑顔を、今もって忘れることはできない。寺島先生が42歳、私が35歳であった。

研究室を共にした日々

それ以来、本当に不思議なご縁で、その年の4月から、刑法が専門の寺島先生と、刑事訴訟法が専門でドイツ語に堪能な池田秀彦先生、そして、心理学・教育学が専門の私の3人で、同じひとつの研究室で仕事をさせていただくことになった。ドアを開けてすぐのところに寺島建一先生の机が、奥の窓側に面したところに、池田秀彦先生と私の机が置かれていた。そんな研究環境の中で、寺島先生との長いお付き合いがはじまったのである。お互いが自分の机に向かって仕事をしつつも、よく冗談が飛び交う、明るく楽しい雰囲気職場であった。

今でも、私の脳裡に焼きついて離れない光景は、当時、寺島先生が、机の上に山積みになった通教生のレポートに、ひとつひとつ丁寧に目を通しながら、添削をしておられたことである。通教生の皆さんが、日々、時間がない中を、一生懸命、勉強し、作成した手書きのレポートの一通一通に、夜遅くまで目を通され、丁寧にコ

メントをされていた姿を、今もって忘れることはできない。

当時は、今のように優れた機能を備えたパソコンなどはなく、ただ、日本語を入力できるだけのワードプロセッサが普及し始めたばかりの頃であった。寺島先生は、新しい環境への順応性がめっぽう強い方で、ワープロにもすぐに適応され、自分のものにされていった。ただ、当時のワープロは、お世辞にも性能が良いとはいえないものであったので、黒色の大きな型のワープロを前にして、「ワープロだと、難解な『法律用語』が本当に入力しづらいんだよねえ」と、嘆いておられたことが懐かしい。

そんな言葉を何度となく耳にしながら、私は、自身のはじめての著作となった『人間行動の心理学』（北大路書房・吉川成司先生との共著）の原稿を、若かったこともあって、1日4ページ分を書き上げると決めて、夜の10時、11時までワープロと格闘していたことが、つい、昨日のこのように思い起こされる。『人間行動の心理学』は、版を重ねて、今でも、通信教育部の「心理学」のテキストとして使用されているが、この本は、寺島先生と共に過ごした研究室から誕生した、忘れることのできない私の思い出の一書である。

学生思いの気さくな人柄

通信教育部での日々といえは、当時の教員で、年に一度、親睦をかねて、皆で旅行をしたことが、懐かしい思い出として残っている。皆、多忙なこともあって、大抵は1泊2日の旅行であった。旅館で、お風呂をご一緒させていただいた折にも、人一倍、学生思いだった寺島先生は、湯船につかりながら、ひとり一人の通教生のことを常に心配され、気にかけておられた。特に、年配の通教生の方々の学習面や生活面のことを気にかけておられた。片時も通教生の存在を忘れることのない先生であった。

大学の研究者といえは、ともすれば、難しくとつつきにくい顔つきをした人を想像しがちであるが、寺島先生は、本当に笑顔が素敵な方で、通教生はもとより、出会った人すべてに、気さくに話しかけられる方であった。老若男女分け隔てなく、会う人会う人、皆、友だちになっていかれるのである。通り一遍の形式的なことは大嫌いな方であった。

「挨拶」の「挨」という字には「おしひらく」、「近づく」という意味が、そして、「拶」には「せまる」という意味があるが、寺島先生という方は、自ら進んで相手に語りかけ、自然な語らいや雰囲気の中で、相手の心を開いていく対話の名人であった。その人懐こい笑顔は、教育者としての寺島先生の最大の魅力であったように思う。そのような教師としての在り様は、私の目標でもある。

さて、四半世紀前に、寺島先生と5年の歳月をともに過ごした、かつての通信教育部の研究室棟は、今では、装いを新たにして、創価大学の「心理教育相談室」として生まれ変わっている。地域の方々が、カウンセリングを受けるために、気軽に訪れる場所となっている。現在、私は、週に1回、その「心理教育相談室」の一室

で、大学院の文学研究科の臨床心理学専修の先生方と共に、院生対象の授業をおこなっている。

本当に不思議なことであるが、現在、院生と授業をしているその部屋は、実は、かつて、寺島先生と共に過ごした研究室があった場所である。今さらながら、寺島先生との深いご縁を感じずにはおれない。大学院生と時間を共にするたびに、寺島先生と楽しく仕事をさせていただいた日々が、走馬灯のように思い浮かんできて、感慨深いものがある。

共著の出版と授業の思い出

さて、その後、1992年（平成3年）に、通信教育部から教育学部に籍を移した私は、寺島先生とは専門分野が異なることもあって、通教のスクーリングで、時折、ご一緒させていただくことはあったものの、研究や教育活動の面では、ご一緒させていただく機会は少なかった。

ところが、あるとき、寺島先生と食事をご一緒した折に、「現代の教育問題に関する著書を、一緒に執筆しませんか」との話をいただいたのである。

寺島先生は、「刑法」が専門であるが、実は、1987年（昭和62年）に、佐瀬一男先生らとの共著で、『非行少年はこう扱われる—発見・調査・審判・処遇の実態』（関力編・有信堂）を著わされており、青少年問題についても多大な関心を寄せられていた。この本でも、第2章「少年非行の動向」、および第7章「少年法改正問題」を執筆されており、青少年問題について強い関心がおありであった。

こうした経緯もあって、現代のさまざまな教育問題については、教育学の分野から論じるだけでなく、心理学や児童福祉、さらには、法学といった幅広い視点から、言及してみてもどうかとの提案をしてくださったのである。

この提案がきっかけとなって出来上がったのが、寺島建一・鉤治雄・柴田博文・和田光一の4人の共著による『子どもの育成と社会』（八千代出版・2000年）である。刊行に際して、出版社とのあいだを取り持ってくださったのも寺島先生であった。先生は、刊行に際して、法学者らしく、最後までハードカバー（堅い表紙の本）での出版にこだわっておられたことが、今となっては、本当に懐かしい思い出である。

本書は、全4章立て、294頁で構成されている。第1章「子どもの心の理解と変容」は、臨床心理士でもある柴田博文先生が臨床心理学の立場から健筆をふるっておられる。また、第2章「変化の時代の子ども」は、私が、主として教育学の視点から執筆した。第3章「現代の社会福祉と子どもたち」は、児童福祉の視点から和田光一先生が執筆をされている。そして、最後の第4章「現代社会と少年法制」を、寺島建一先生が法学者の立場から執筆されている。第4章では、子どもの権利や子どもをめぐる諸問題、少年法制についてわかりやすく論述されている。第4章の執筆にあたって、寺島先生は、私の拙論「家庭内暴力に関する研究の動向と問題」（創価大学教育学部論集第31号、1991年）の一文も引用してくださり、感謝にたえ

ない。この章で、寺島先生が一貫して主張しておられたのは、「少年法」は、あくまでも子どもの人権を擁護するために存在するということであった。

こうして刊行の運びとなった『子どもの育成と社会』は、心理、教育、福祉、そして法律という異なった専門分野から、現代教育の諸課題について論じた画期的な一書となった。その後、「少年法」の改正もあって、2003年には、改訂版が出されることになったが、本書は、多くの大学の図書館にも置かれ、学生たちによって活用されている。寺島先生との共同での著作は、残念ながらこの一冊だけになってしまったが、今となっては、本当に懐かしい思い出である。

そして、この出版が機縁となって、本学の全学部の学生を対象にした共通科目「現代教育の諸問題」が開講されることになったのである。この「現代教育の諸問題」という授業は、前後期1回ずつ開講され、鉤、柴田、和田、寺島の順で、各人がそれぞれ3～4回の授業を連続して担当するオムニバス形式でおこなわれた。毎年の授業とも、最後の数回分のまとめの授業を担当して下さったのが寺島先生であった。講義に際して、大変な情熱をもって臨んでおられた先生は、毎回の授業とも、終わりのチャイムが鳴るギリギリの時刻まで、熱心に講義をして下さった。

授業がおこなわれていた当時の教室は、かつての中央体育館横にあった旧大教室のS101教室であった。残念ながら、現在は、新総合教育棟の建設のため、取り壊されて無くなっている。1時間目の授業であったにもかかわらず、毎回、300名ほどの受講者があり盛況であった。この授業は、寺島先生がご病気になられたことから不開講となり、現在にいたっている。

創立者とともに歩まれた勝利の人生

寺島建一先生は、日頃から、近隣の方々を心から大切にされ、親しくお世話をされていた。私も、家が近かったこともあって、さまざまな機会にご一緒させていただいたが、本当に面倒見の良い方であった。

創価大学の創立者池田大作先生は、常日頃から、大学周辺の地域の方々に最大の心配りをされてきたが、寺島先生は、お住まいが大学の近くだったこともあって、創立者の心を自らのものとして、地域の方々との交流を誰よりも大切にしておられた。私の手元には、20年ほど前、寺島先生と私が、近隣の方々と共に、満面の笑顔でおさまっている一枚の写真があるが、その写真を目にするたびに、当時のことが、昨日のこのように思い出される。

寺島先生は、創立者池田先生からいただいた書籍『妙法蓮華経並びに開結』と、創立者の揮毫が認められた創立者とブライアン・ウィルソンとの対談集（英語版）を生涯の宝として、研究と教育に邁進して来られた。池田先生を人生の師と仰ぎ、心からお慕い申し上げていた寺島先生は、ここ数年、自宅で静養されているときも、これらの書籍を仏壇の前に置かれ、再び健康を取り戻し、使命の庭で戦えるようにと真剣にご祈念しておられた。その真摯な後ろ姿から、人間として多くのことを教えられた。

大学での寺島先生は 誰よりも学生思いの人であった。通り一遍の教師と学生との関係でなく、常に、通教生と語り、通教生とともに行動し、通教生と触れ合うのが、本当にお好きな方であった。地方スクーリングの折にも、通教生の要望があれば、セミナー講師も快く引き受けられ、スクーリングの疲れも見せずに、セミナー会場に馳せ参じておられた。

通学生とも深い交流があり、ゼミ生を心から大切にされていた。ゼミ旅行での楽しい思い出もよく聞かせていただいた。ボクシング部の顧問も、進んで引き受けられた。寺島先生にとって、通教生や通学生との触れ合いは、最大の喜びであり、苦になるどころか、それを心から楽しんでおられた。部類の学生好きという点では、おそらく右に出る教員はいなかったように思う。

かつて、詩人の宮澤賢治は、岩手の農学校での自らの教員生活を回想して、「この四ヶ年が わたくしにどんなに楽しかったか わたくしは毎日を 鳥のように教室でうたつてくらした 誓って云うが わたくしはこの仕事で 疲れをおぼえたことはない」(「生徒諸君に寄せる」下書きより)と書き綴ったが、寺島先生の大学教員としての生活は、まさに賢治の言葉を地で行くものであった。

創立者を尊敬してやまず、ゼミでは、毎年のSGI提言を学習の教材にして、学生と共に、平和問題について真剣に研鑽に励んでおられた。本当に頭の下がる思いであった。

ここ数年、体調を崩され、自宅で療養をされていたときも、常に学生のことを気にされ、亡くなる一週間前まで、週1回の「自主ゼミ」を開講されるなど、最後の最後まで、学生とともに歩まれた人生であった。

創立者池田先生は、「大学は学生のためにある。教員は学生のためにいる。それが根本です。創価大学は、どこまでも、この『学生第一』の精神を堅持してもらいたい。教員の皆さん方は、学生から『いい先生だな』『思い出深いな』と言われるようになっていただきたい。親以上に優しく、いい意味で厳しい、教育の出会いの劇を刻んでもらいたい」(北京師範大学「名誉教授」授与式2006年10月7日)と、われわれ教員を叱咤激励されたが、寺島先生は、この創立者の言葉を、誰よりも強く心に刻んで実践しておられた。

盟友との出会いに心から感謝

2007年5月3日——寺島先生は、創立者から、「偉大なる教育者 寺島建一先生の 御健康と御活躍と 栄光を祈りつつ」との最大の激ましと讃辞の言葉をいただかれている。その生涯は、まさに、この激励のとおり、偉大な教育者としての一生であったと確信している。

創立者池田先生は、「『通信』とは、師と弟子が、互いに『信』を通わせ合う教育である」(「創価大学通信教育部開学式メッセージ」1976年5月16日)と、私たちに指導して下さったが、そのご指導どおり、寺島先生の生涯は師匠を求め抜き、師匠のすごさを、学生に伝えていこうという意欲に満ち溢れておられた。

家庭にあっても、模範の父親として、奥様と共に、二人のお子さんを素晴らしい人材に育てあげられた。現在、息子さんは、高校を特待生で卒業され、難関の司法試験を見事に突破し、法曹界で大活躍をされている。創価大学教育学部卒業の娘さんもまた、持ち前のひとときわ明るい笑顔で、北海道の地で、子どもたちはもとより、多くの父母からも慕われる教員として、未来の子どもたちの育成に尽力されている。子どもさんを立派な人材に育てられたこと自体、創立者の激励どおり、偉大な教育者として、尊き一生を歩んでこられた何よりもの証である。

2011年7月7日——寺島建一先生は旅立たれた。柔和な笑みを浮かべた、それはもう本当に素晴らしい笑顔であった。寺島先生との出会いが、笑顔に始まり、笑顔で終わったことを、心の底から実感させられた日でもあった。

生きるということは、多くのものを失うということと隣り合わせでもある。

スイスの哲学者ヒルティは言った。

「何事につけても、『自分はそれを失った』といっってはならぬ。『自分はそれを返した』というべきである。君の息子が死んだら、それは返したのである。君の財産が奪われたら、これもまた返したのである」(ヒルティ『幸福論』岩波文庫)と——。

わが子であれ、財産であれ、贈り主が、それをあなたにゆだねているあいだは、それを自分のものとしてではなく、他人のものとして所有しなさいとヒルティは言う。そして、贈り主が、それを取り戻そうとしてやってきた場合には、贈り主にしたがるべきであると。あたかも一夜だけ宿泊をした旅人が、お世話になった宿屋を離れるように——。

盟友という人生の財宝を返したという事実は、私にとって、本当に辛く悲しい来事であった。

しかし、この四半世紀、束の間の出来事ではあったが、私は、寺島先生というかけがえのない心の財産を得て、本当に幸せであった。盟友という最高の財宝に出会えたことに心から感謝している。

寺島先生——今度、生まれ変わって来られたら、また同じ部屋で、あなたと一緒に、机を並べて、思う存分に仕事をしましょう。そして、心行くまで語り合ひましょう。

「偉大なる教育者 寺島建一先生」——創立者池田先生が、最大の賛辞を贈ってくださった方と、再び会いまみえる機会を心から楽しみにしつつ——。